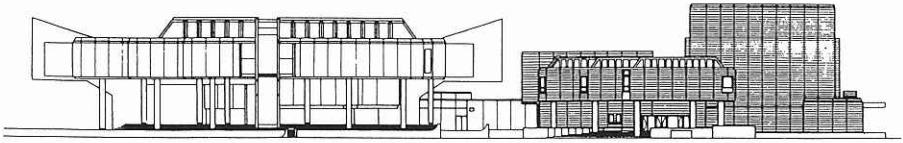
ウラジロ（Gleichenia glauca Hook）佐賀市大和町
ウラジロ科の常緑シダ
アジア各地に広く分布

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ARTMUSEUM

25 December 2005
No. 135



レポート

韓流で行く博物館・遺跡めぐり

韓国旅行は気ままが安心

数年前から年一度、気候の良い五月頃に韓国の博物館・遺跡めぐりをやっている。休日を入れて３日間の一人旅である。身に付けて行くのはパスポートと博多―釜山間ビートル往復券と多少のお金くらいのもの。列車もホテルも予約は一切なし、会う人もいない。韓国語などまったくダメ。せいぜい「カンサムニダ」「アンニョンハシムニカ」、キムチ、ビビンバ程度である。「そんなことで大丈夫か？」と心配してくれる人もいる。最初は自分なりにかなり綿密な計画を立てようとしたのだが、考えてみると不確かな情報で計画どおりに事が運ぶ保証もないし、予約なんぞに拘束されるのもアホらしい。で、文字通り行き当たりばったりが一番確実だということになった。心掛けているのはただ一つ、いざとなったら何処ででも野宿する覚悟、それだけ。それ以外の準備や心配はむしろ邪魔というものである。とにかく行ってみてから考える。

言葉？―一般の人に漢字や英語は通じない。しかし気持ちは万国共通語だ。ワーワーやっていればどこからか日本語の分かる人が現われることだってある。

宿？―街中でそれらしい「旅館」を見つけたら、臆せず飛び込む。決して上等と言うわけにはいかないが日本では広めのビジネスホテルといった感じ。当然、当たり外れはある。安全に寝られさえすればよし。

食事？―出されたものは何でも食う覚悟で手頃なメシ屋を探す。メニューを見ても分からないとなれば韓国料理の名を何でもよいから伝える。仮に単品を伝えても、ご飯やおかずが一緒に出るのが普通なので、よけいな心配はいらない。

交通？―断然バスが便利。目的地直行で、乗る前にチケットを買うから間違いはない。地下鉄なら運行地図で行先の駅を見つけ、自動販売機でチケットを買う。街の中では市内バスよりタクシーが安全、運転席のメーターを見ていて料金を払えばよい。

で、お金は？―金は、自慢ではないが日本円で３千円以上の部屋には泊まったことがない。高速バスも、例えば釜山から80㎞離れた慶州まで日本円で360円という驚きの安さ！タクシーも日本のバス料金並である。食事は、地方都市だと単品を頼んだつもりでもテーブルいっぱいに皿が並び、ビックリすることがある。それでも支払いは日本の昼定食程度だ。

そんな旅行で、しかも日本の千円≒韓国の１万ウォンとくれば、気分はすっかり御大名。「万事よきにはからえ」ということになる。港で円をウォンに替えてしまえば、後はこれまで金のことで心配したことはない。

博物館を政策的に活用する

博物館・遺跡めぐりといっても、実は、古代日本ととりわけ関わりの深い朝鮮半島南部の自然や風土に直に触れてみたい、それだけのことである。南部といっても結構広い。ほんの一部を見て全てがわかるわけもないが、考古分野に限り、私なりに興味深く思ったところを二、三、述べてみよう。

とくに感じられるのは、なかば政策的とも思える博物館や遺跡の積極的な活用である。一つは観光資源として、もう一つは学校教育における教材としての利用である。勿論、同じ考えは日本でもあるが、韓国の場合はなおさら強いような気がする。

観光面では近年、遺跡とともに博物館の整備が進み、とくに日本でも話題になった遺跡の多くが日本人の観覧者を強く意識したつくりになっていることに驚く。例えば、釜山の東にある金海大成洞古墳群は、日本で製作された倭系遺物が多量に出土したことで知られるが、2003年、国立金海博物館とは別に、大成洞古墳群博物館が開館した。遺跡の整備はわりと簡素で、一般の見学者には少し物足りないかもしれないが、資料館

竪穴住居や物見櫓が復元整備された金海市鳳凰洞遺跡

には日本語解説員のボランティアが二名いて、親切に案内を申し出てくれた。日本語の音声ガイドや日本語表記のパンフレットもあるからずいぶん助かる。

同じ金海市の鳳凰洞遺跡は、日本で昔から知られる有名な無文土器時代の貝塚で、九州の甕棺「金海式」の型式名にもなっている。現地には現在、竪穴住居や物見櫓など復元建物があり、まるで吉野ヶ里遺跡に来たようだ。さらに現在、市街に面した遺跡の反対側でも復元家屋等を配した公園整備が進んでいる。

また、洛東江を遡った伽耶国の有力地域の一つ咸安には末山里古墳群がある。これも2003年、古墳群に木道が設けられ見学できるようになり、丘陵下には古墳群と一体に博物館が開館した。ちょうど訪れた時には博物館の近くで古墳の発掘調査が行われていたが、近寄らせてももらええなかった。観光資源の故かと、やっかみたくもなる。同様な経験は別の所でもあり、どうやら発掘調査は一般を完全にシャットアウトというのが韓国流らしい。ただし、ここでも日本語を話す女性が受付けにいて、列車の時刻表まで調べてもらい大いに助かった。日本語の話せる解説員の配置は日本人の観光客の多い慶州あたりでは当然で、聞けばボランティアが多い。とにかく熱心さには頭が下がる。

ところで、韓国から佐賀県にお客さんが来ると、百済の武寧王の生まれた唐津市加唐島に行きたいという人が案外多い。武寧王は『日本書紀』に百済からの渡航途中、加唐島で生まれたとある。1971年に公州宋山里古墳群でその墓が発掘され、韓国で一大フィーバーを招いた古代史上の大スターなのだ。現地資料館とは別に、2004年にリニューアルなった国立公州博物館でも、武寧王陵のコーナーは最大の見どころでもある。ところが佐賀の人は大概「それ誰？」とくる。両国に

末山里古墳群の麓にある咸安博物館、右は調査中の古墳

関わり深い武寧王にして、この温度差には驚かされる。また、学校との連携では、とくに大都市部で学校が学習の一環に博物館を利用することが多いらしい。国立慶州博物館や釜山市立博物館で見る子供たちの行列、あの賑わいはどうだ。この点、我が方は実にお寒い限りで、唯ただ羨むばかりである。

慶州国立博物館で学校の子供たち

意外と不便な展示説明

博物館・遺跡の活用に熱心なわりに、我々日本人に不便なのが展示資料の表記だ。長い解説だとハングルの他に英字でもあればまだしもだが、そこまでは望むまい。せめて展示品の名称と時代・年代くらいは知りたいと思うのだが、展示資料のキャプションがすべてハングルだと、私などは完全にお手上げである。

時代・年代が数字で○○年、△世紀と明記されていない場合も多く、聞けば複製品の場合はあえて表記しないのが流儀とのことである。どの博物館でも人気のある金冠や玉類など装飾品は数に限りがあるから、複製品が多くなるのはやむを得ないだろう。しかし、それにしても時代・年代の表記は必要である。第一、複製なら複製と分かるように明記してくれないと困る！（怒っても仕方ないが）。読めないだけに、実物と複製の区別が実に悩ましく、腹立たしくさえなる。

そうなると、あらためて漢字というのは実に偉大だとつくづく思う。韓国よりも中国の展示の方が親しみやすいのは、例え字体が簡略化されていても、何となく文意は通じるからだろう。漢字文化圏の日本・中国・韓国・ベトナムで英語以上に国際性をもつ文字といえば漢字だ。ハングルの中に最小限必要なキーワードが漢字で拾い読みできるなら、日本人や中国人には韓国の博物館が格段に親しみやすくなると思うのだが。

（当館副館長　田平徳栄）

エッセイ

蒼海へのまなざし

没後100年蒼海副島種臣―全心の書―展・覚書

蒼海こと副島種臣の書のことで、印象深くおぼえていることがある。十数年前のこと、ある老書家が遠路来館、蒼海の大作を閲覧された。しばし閲覧の後、随行した人が終わりをうながす声をかけると、「この書の前から離れることが出来ない」、となおも長い時間その大作の前に立ち尽くしておられた。

また十年前、博物館で「没後90年副島種臣展」を開催したとき、中国からの博物館関係者を案内したことがあった。当然はじめて種臣を知ったこの中国からの人は、「この書からはまったく欲というものが感じられない。書いた人がそういう人だったのでしょう」、と何か呆気にとられたような驚きをもって話された。

今日、蒼海書はひろく愛好されているが、いつ頃から評価を得たのだろう。

『墨美』43号「特集副島蒼海」

昭和30年発行の書道雑誌『墨美』43号「特集副島蒼海」には武者小路実篤、安倍能成、有島生馬、岡田久次郎、谷川徹三、伊東卓治による文および図版117点が掲載されており、本格的に蒼海の書を世に紹介した最初の出版物といってよい。また昭和39年発行『墨美』140号「特集蒼海」では上田桑鳩、胡粛成、荒尾親成、山口勝朗による文ならびに副島種経（種臣の孫）による年譜および図版121点が掲載されている。両書は蒼海書研究の基本文献である。

この墨美140号において前衛書家として知られる上田桑鳩（1899～1968）は、「わたしが蒼海の書を初めて見て驚嘆したのは、昭和六七年ころのことだと思う…（中略）…昭和八年から比田井天来門下生の有志が集って書道芸術社を結成…（中略）…本格的に蒼海研究が始まり、機関誌「書道芸術」に作品を掲載したり、論を発表したのである」、と記している。たしかに宮澤昇「副島種臣文献目録」（『墨』117号平成７年12月）によれば、墨美43号以前の文献等で蒼海書に関するものとしては、昭和27年の『奎星』６号の上田桑鳩「蒼海の書について」、大澤雅休「副島蒼海の書について」だけである。

また上田桑鳩は、「書によって美術することの可能性を、わたしたちに示唆している」、と蒼海書が美術作品として、当時の書家に対して影響力をもっていることを記しており、蒼海書の本格的評価を決定つけたといってよい。東洋において主要な芸術の書は、もちろん西洋的な「美術」にはない分野である。たとえば日展に書の部門が創設されたのは戦後になってからであり、上田桑鳩の活躍した時代は、書が美術のひとつの分野として、ひろく認められるようになった時期にあたっている。

白樺派と蒼海

一方、墨美43号に蒼海書を賞賛する文をよせた作家や思想家は、いちはやく近代的な美術作品として評価していたようにおもわれる。つまり武者小路実篤と有島生馬は、伝統的なものよりも西洋の芸術からより大きな影響を受けていた白樺派の作家であるからだ。

武者小路実篤は自分より先に蒼海書を評価したのは、おなじく白樺派の代表的な作家、志賀直哉（1883～1971）であったと記している。志賀直哉の妻は、種臣の孫にあたる康子（勘解由小路資承に嫁いだ種臣の娘豊子の娘）であり、また志賀直哉の弟、直三の妻も同じく種臣の孫の順子（種臣の息子道正の子）で、もちろん種臣没後のことだが志賀家と副島家とは親類関係になる。また武者小路実篤は、勘解由小路資承を叔父としており、白樺派の同人たちが蒼海書に関心を示した背景として、このような人間関係がうかがわれる。ほかにも河東碧梧桐（1873～1937）、高村光太郎（1883～1956）、中川一政（1893～1991）、棟方志功（1903～1975）といった人たちが蒼海書に関心を示していた。

明治における蒼海書の評判

種臣の同時代、人々は蒼海書をどうみていたのだろう。その当時、蒼海書について言及したものはほとんど知られていない。そこで当時の書画番付をみると、はやくから高く評価されていたことが知られる。いくつかの例を瀬木慎一『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成―書画の価格変遷200年―』（里文社　平成12年４月）から拾ってみよう。

○明治10年・竹村貞次郎編輯兼出版「全国書画集鑒」

「書之部」の「儒文書」として「東京　副嶋種臣」。
※同列に高橋泥舟、勝海舟、山岡鉄舟、巌谷一六など。
○明治16年・清水嘉兵衛編輯兼出版「日本書画価額表」
「精密書一葉価額」として「一々学人　同（東京）芝烏森町　金十四円　副島種臣」。※金十五円の三条実美に次いで二番目に記載。
○明治16年・東花堂宮田宇兵衛「全国古今書画定位鏡」
「今人書画部」に「儒書　東京　金七枚　副島種臣」。※「今人書画部」では金七枚が最高額でほかに勝海舟、山縣有朋、榎本武揚など。別に「銘家部」があり三条実美は金十枚。
○明治23年・松雲堂「明治諸大家書画人名一覧」
「詩文書歌ノ部」に「一々学人　同（詩文書）正三位勲一等伯爵　ニ　副島種臣」。※「ニ」は「金四円」で「凡二円以上十円迄」とする。

これらから、おそくとも明治10年頃にはすでに蒼海書は人気を得ており、「儒文書」・「儒書」・「詩文書」という区分や「正三位勲一等伯爵」の肩書きが付され、文人あるいは知名士の書として扱われていたことが確認できる。

つぎに明治38年、種臣没後の追悼文としてしばしば引用される内藤湖南「神秘の人副島伯」（大阪朝日新聞明治38年２月３日）をみてみよう。その末尾ちかくに、「伯が天成の秘は其の芸能に於て頗る之を発揮するの路を得」、とあり、それにつづけて詩と文について言及したのち最後に、「筆札も亦之に称（かな）ひ、高古勁秀名状すべからず」、と簡潔に記される。つまり、筆跡も詩や文とつりあって、けだかく古風にして強くそして秀でており、形容を言いあらわせないとする。同時代において種臣は、当然のごとく第一に明治の元勲であり、それに先んじて芸能が論じられることはなく、芸能のなかでも詩、文、書の順で、書だけが単独で評されることはなかったのであろう。

郷里佐賀での作例

佐賀県内には生誕地である佐賀市を中心に、社寺の扁額をはじめ記念碑等、直接種臣に依頼して書かれた作例が数多く残されている。制作時期の明らかな主なものは次のとおり。

・「江藤新平君墓」銘　明治14年　佐賀市・本行寺
・鍋島直正忠薫碑「宣下文」　明治15年

佐賀市・佐嘉神社
・「神降百福」額　明治17年　佐賀市・与賀神社
・「佐賀新聞」題字　明治17年
・「協和館」額　明治19年　佐賀公会堂（佐賀市蔵）
・「議事堂」額　明治19年

佐賀県会議事堂（佐賀県蔵）
・「火国鎮守」額　明治20年　佐賀市・与止日女神社
・「嗚呼忠士之碑」銘　明治23年　鳥栖市・日子神社
・「成富君水功之碑」銘　明治24年　佐賀市
・「宏済閑」額　明治34年頃

西有田郡会議事堂（伊万里市蔵）

依頼の動機として第一には郷里出身の偉人の書であったとしても、ほかでもなく種臣に書の依頼がなされたのは、すぐれた書としての判断があったというべきであろう。蒼海書に対する関心は、明治のはじめから明治38年の没年まで、またそれ以降もが途絶えることはなかったといってよい。だたし、その関心のありかたには時代によるちがいがみられる。明治の元勲としての記憶が時間とともに薄れていき、その一方で書の評価が徐々に高まっていった。現在では書に対する関心が逆に元勲、詩人としての副島種臣への関心を呼び覚ましている。没後百年にして種臣の実像がよみがえりつつある。

（当館学芸員　福井尚寿）

唐人佳句　副島種臣筆
明治19年（1886）
館蔵

展覧会報告

平成17年度佐賀県立博物館（夏休み子供ミュージアム）博物館常設特別展
『理科室の住人　ー標本の世界を探検ー』

1．展覧会の狙いと準備

現在の理科教育において、剝製・液浸標本・植物乾燥標本・生物模型等は使用されなくなり、理科室の棚の奥に仕舞われたまま埃を被っている。これらの剝製を中心とした資料の中には、現在入手がほとんどできない貴重なものが多く含まれている。例えば、2003年10月10日に野生絶滅したトキ（Nipponia nippon）トキ科トキ属、絶滅危惧IA類（環境庁）のクロツラヘラサギ（Platalea minor）トキ科ヘラサギ属はその代表である。これら剝製、液浸標本が使用されなくなった理由は、教育課程の変更や映像技術の進歩等によって、実物・実在提示教育からコンピューターの画面に見られるような映像中心教育へと変化が起こったためであろう。平成17年4月より、剝製等資料の調査を開始した。小・中学校を数校調査したが、まとまった資料が確認できなかったため、高校を中心に調査することにした。その結果、剝製・液浸（ホルマリン漬け）標本・生物模型等を表1のように借用した。

表1　借用先一覧

借　用　先	借用点数
佐賀県立佐賀西高等学校	16
佐賀県立佐賀北高等学校	40
佐賀県立神埼高等学校	22
佐賀県立三養基高等学校	26
佐賀県立鳥栖高等学校	9
佐賀県立小城高等学校	18
佐賀県立唐津東高等学校	7
佐賀県立伊万里高等学校	7
佐賀県立佐賀農業高等学校	2
佐賀市立本庄小学校	11
計	158

2．展示構成

(1)　放課後の理科室

授業が終わった夕方の理科室は、どことなく異様な雰囲気がある。実験台の上に無造作に置かれた器具・

トキの剝製

装置、壁には科学関係のポスター、こちらを覗き込むような剝製の目が光っている。そんな雰囲気を展示で再現した。

(2)　水の中の生き物達

生物は約38億年前に、水の中で生まれたといわれている。最初の生命体は、外界からの境としての膜を持ち、内部には波打ち際で作られたリンを含んだRNA（DNA類似物質）型の遺伝子を保持し、その指示に従って増殖と進化を続ける有機体であった。その子孫である無脊椎動物から脊椎動物（魚類・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類等）で現在水中生活を主に行っているものの剝製・液浸を展示した。

(3)　水辺の生き物達

水中で進化した動物（脊椎を持った魚類）は捕食者から逃れるために、海から川へ移動し、さらに進化をして安全な水辺へと生活の場を移していった。その子孫である両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類で現在、水辺が主要な生活場所であるものを展示した。

(4)　陸と空の生き物達

生活環境を水辺から乾燥した陸上・空へと移し、こ

れに完全に適応した形態と機能を持つ動物へと進化が進んだ。餌を求めての移動は、あるものは体をくねらせ、あるものは体重を支える素早い移動を可能とする脚へヒレ等を変化させ、あるものは前脚を翼へと変え、生活空間を陸上から空中にまで大きく広げていった。これらの生き物は、環境に適応するにつれ大きな多様化の道を進みさらに進化した。ここでは陸上生活に完全に適応して生活しているものを展示した。

(5)　石になった生き物達

地上で死んだほとんどの生物体は、死肉捕食者・バクテリア等のために、その形態を残すことはなかったが、中には地殻変動等により、地下に埋没し、さらなる変動によって深く埋まり高い圧力を受け、その形態を変えることなく、岩石に置き換わったものを化石とよぶ。化石は生物体のみならず、糞・卵殻・足跡・巣穴跡等も化石となる。ここでは、特に、動物（節足・軟体ほか）と植物（シダ・裸子・被子）の葉などの化石について展示を行った。

(6)　理科室のお友達

ニワトリの解剖模型

イヌの骨格標本

ここでは理科室ならではの解剖・骨格標本を中心に、なじみの深い昆虫や植物の標本を展示した。人体解剖模型・人体解剖図・骨格模型・鳥類解剖模型・哺乳類骨格標本・DNA構造模型等は特に来館者の注目を集めた。特に鳥類（ニワトリ）の解剖模型は珍しく、ヒトの胃とは、形と数が異なるものであることが示されていた。また、人体解剖模型の新型のものは塩化ビニル製でリアルに作られていた。

3．終わりに

筆者が小学生の頃、理科の授業時間に、教師からワ

ライチョウ剝製（♂・♀）

センザンコウ剝製

ニの剝製を見せられ、「日本には生存しない生き物で、成長するとヒトを襲うこともある」といわれたことが強く印象に残っている。それ以来、理科の生物分野の授業で、剝製を使った説明は受けたことがない。

現在のカリキュラムでの正式な理科の授業が開始されるのは、小学校の３年次からで、生き物の提示は比較的簡単に飼えるメダカ等で、ホ乳類・鳥類等珍しい生物はテレビの映像で提示されるにすぎない。映像はその生き物の姿・形・色は分かり易いが、その大きさが分かりにくい。

一方、剝製・液浸標本は実存した姿・形をそのまま保存の状態に加工したもので、その生き物の大きさと質感を知るには、最適の資料である。その意味でも、今回開催した「理科室の住人」展は意味を持つものであったと思う。

７月15日㈮から９月４日㈰まで、45日間の展示（休館日を除く）で、総観覧者数は13,848名、一日平均308名であった。その間、３回のギャラリートーク（展示解説）を実施した。また、８月の３～５日の３日間のギャラリースケッチには、保育園児から中学生までの子ども達が54名も参加してくれ、その作品は１カ月間展示場内に掲示した。

ギャラリースケッチ

（当館学芸員　中尾研二）

今後の展覧会の予定　《博物館・美術館主催による展覧会など》

没後100年「蒼海　副島種臣―全心の書―」展

平成18年１月１日(日)～１月29日(日)

会場：美術館２・３・４号展示室　　観覧料：有料

主催：佐賀新聞社・美術館・本丸歴史館

■美術館　常設特別展

平成18年２月３日(金)～３月５日(日)　**「洋画のまねび―描くことの近代―」**

会場：美術館２・３号展示室　　観覧料：無料

■博物館　テーマ展示

平成18年１月17日(火)～２月26日(日)　**「書家・中林梧竹の絵画」〈美術〉**

平成18年２月28日(火)～４月９日(日)　**「生き物のふしぎをみようIII」〈自然史〉**

会場：博物館３号展示室　テーマ展示コーナー

観覧料：無料

■美術館　『肥前刀』　会場：美術館１号Ａ展示室　観覧料：無料

■美術館　『玉手箱』

平成18年１月17日(火)～２月26日(日)　**「鏡・玉・剣」**

平成18年２月28日(火)～４月９日(日)　**「黒田清輝と藤島武二」**

会場：美術館１号Ｂ展示室　　観覧料：無料

■美術館　コレクション展・テーマ展示

平成18年３月10日(金)～４月９日(日)　**「松本弘二と池田幸太郎」**

会場：美術館２号展示室　　観覧料：無料

平成18年３月10日(金)～４月９日(日)　**没後300年「藩主・鍋島綱茂の書画」**

会場：美術館３号展示室　　観覧料：無料

佐賀県立博物館・美術館報　第135号　　平成17年12月25日

編集発行　佐賀県立博物館・美術館

〒840-0041　佐賀市城内1-15-23　TEL0952-24-3947　FAX0952-25-7006

ホームページアドレス　http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko-bunka/k-shisetu/hakubutu/index.html

E-mail　hakubutsukan-bijutsukan@pref.saga.lg.jp

印　　刷　大同印刷株式会社